



春秋戦国時代の友情 (刎頸之交②)

11月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2022年11月11日(金)

戦国時代最強の大国は秦である。

秦が他の六国を追い詰めていく常套的な外交戦略の一つは、相手の国に内紛を起こし、それにつけ込んで弱体化を図ることだった。

趙に対しては、趙王が秘蔵する「和氏の璧」を、秦の城邑十五と交換して欲しいと言う難題を持ち込んだ。

趙王は、大將軍廉頗をはじめ、主だった重臣を集めて協議した。璧を与えても城邑は得られない。騙されるだけだという説。いや、与えなければ秦の攻撃を受けるという説、また、秦に差し向ける使者の人選も難航した。

この時ある者が言った。「私の食客に藺相如と申す者がおります。あの男なら適任かと思えます」。

かくて、趙王は、相如を使者にとりたて、璧を預けて秦に赴かせた。相如は璧を持参して行かず、理を尽し、秦王の義を讃え、巧みに弁じ、秦も土地を与えない代わりに、趙も璧を与えないという形で落着をさせた。趙王は相如の功績を認めて、大臣とし、同じ大臣である廉頗の上位においた。

その後、廉頗は、「口先だけの相如の下位に立つことは耐えられない。奴に会ったら、必ず侮辱してやる」と公言した。

相如はそのことを人づてに聞いて、朝儀には病気と称して欠席し、廉頗と顔を合わさないように心掛けた。また、相如が外出した時、遠くの方から廉頗がやってくるのを見て、慌てて脇道へ逃げ込んだ。

さすがに家臣たちも見ると見かねて、「もう我慢できません。暇を取らせていただきたい」と言った。

相如は、「あれほどの強国秦が、わが趙を攻めないのは、廉頗將軍とこの私が頑張っているからだ。今、二人が争えば、秦は簡単にわが国を攻め滅ぼす。私は、個人の争いよりも先ずこの趙を大切にしているのだ」。

これを伝え聞いた廉頗は、肌めぎになって、荊の鞭を背負い、相如に謝罪した。二人はこれを契機として仲直りし、以後「刎頸の交り」を結んだ。

沖縄方言で、親友を意味する「くびちりどうし」は、「刎頸の交り」という意味である。

参考：(司馬遷史記、廉頗・藺相如列伝)